僕と彼女と疑問と

偽屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と彼女と疑問と

【Ｎコード】
Ｎ３４６３Ｄ

【作者名】
偽屋

【あらすじ】
軽い疑問と僕のこの思い。知っているのは少女と僕の親友だけ。
でもその二人は大空になってしまうんだ…。

疑問1つめ★

「人って、大人になって行けば行くほど、
変わっていくものなのかなぁ…」

誰もいない屋上で冷たい風を感じながら

ふと浮かんだ疑問をつい口に出して、空を眺めながら僕は言った。

「そんなこと言ったら、金でだって人は変わるわ。」

何処からか聞こえた声の主は、微かに微笑みを見せながら、軽く言った。

目の前の少女は、制服のスカートの裾を冷たい風になびかせていた。

「…僕はそんなことない。」

うつむいて僕は小さい声で、少女に聞こえるように言った。

「そんなの、その時になってからでないと分かるわけないじゃない。
もちろん、
あんたでもね。」

意地悪っぽい笑顔を、僕に見せ付けるように、少女は僕の瞳を真っ直ぐ見つめていた。

僕は、少女の瞳を見つめ返そうとうつむいていた顔をあげた。

そして、言う前に屋上のドアが開いた。

「あれ？嶋館？何一人で突っ立ってんだ？」

一人の少年が、ぼく—嶋館を見つめていってきた。

どうやら、僕の目の前にいる少女が、こいつには見えないらしい。

そう。見えないのだ。

だって、少女は幽霊なのだから。

僕は、霊感とかないが、何故か少女は見える。

これは、きっと必然だろう。

そんな少女は、長い茶髪の髪を揺らしながら、少年の目の前に立って無邪気に笑って見せた。

それでも少年はびくともせずに僕をみつめていた。

僕は、少年にまとわりつく少女を少しの間見てから少年に向きなおい言った。

「…ちょっとね。屋上が好きだから。」

苦笑をしてみせ、僕はフェンスに寄りかかった。

あっそ、というように、少年は首を傾げて見せた。

「そうそう、山都が呼んでたぞ？」

少年の一言に、僕は少年に勢い良く向きなおした。

「どこで？！」僕の迫力のある声が、少年の聴覚を奪うかのように少年は強く耳を抑えていた。

「きょ、教室だよ。お前、あんまり山都に近づかないほうが身のためだぜ？」

あまりにも僕の声が大きかったのか、少年はまだ耳を押さえつけたままだった。

「身のため？なんで。」

少年の言葉に疑問を抱いた僕は、少年に問いかけた。

その問いかけが何かおかしいのか、少年は目を真ん丸くして僕を見つめた。

「なんでってお前―…」

少年の言葉の続きを待ったが、その途中で屋上のトビラが鈍った音をたてて開いたのに気がついた。

「！早月！！」身を乗り出した僕は、目の前にいる親友の名を呼んだ。

山都早月は僕の親友。とても仲が良い。

「なんだ、早月か。意外とくるのが早かったな。」

何故か少女は一人で語っていた。

「あ…ここにいたんだ、馨。」

僕の名前を呼んで、早月は僕のほうに駆け寄った。

そのときに、少年が微かに早月を避けたことには気づきもしなかったが。

「山都ぉ～。一つだけ言っておくぜ？

お前が嶋館に近づけば近づくほど、嶋館の身も、危なくなってくるからなぁ～♪」

少年は、不気味な微笑みを見せ付けながら、屋上を去っていった。

少年の言葉を聞いた瞬間の早月の表情を、僕は見ることはできなかった。

少女は、気づいていたみたいだけど。

「嗚呼～…暇ぁ～…まったく、あんたが誰かといると、

あたしがすること、なくなっちゃうのよね～。」

フェンスに座るという、今にも落ちそうな体勢をしている少女から目をそらしながら、僕は早月と話していた。

（なぜに、ああ　を漢字にしているのかは謎だけど。

「早月、最近元気ないね…。」

地べたに座りながら僕は寂しい笑顔を早月に向かってみせる。

早月は僕といるときはいつも笑顔を見せてくれるけど

一人でいるときはなんだか寂しそうで、そのいまが早月はとても無理をしている笑顔に見えた。

「え…？そ、そんなことないよ…。」

早月はすばやく僕のとの目線を外した。

僕は、あまり他人と関わったことがないから、相手が寂しい表情をしているとき、自分がどうすれば良いのかがわからなかった。

早月、無理しなくて良いからね。

そんな言葉が、僕のこの口からは出ることがなかった。

そんな優しい言葉が、出てきてくれれば、嬉しかった。

でも、僕が口にしたのは「そっか。」その一言だった。

もしかしたら、一つの言葉で悩む人なんていないのかもしれない。

でも、僕は悩んでいた。

だって、もし早月を傷つけてしまったら、僕のそばに早月はいなくなる。

離れていく。

それが嫌だから、とても悲しいから、僕は早月を大切にしたいから。

早月は話を変えようと、空を見上げてこう言った。

「僕は、いつかこの空のようにみんなを見守っていたいなぁ～。」

そうつぶやいた早月の言葉に、僕は聞こえないように唾をごくりと飲み込んだ。

この空のように…？この果てのない空を、早月は望んでいるのか？

僕はうつむいて、垂れてくる髪で驚いている表情を隠した。

なんで、早月がそんなこと言うのかが、分からなかった。

何故か、嫌に背筋が凍った気がした。

僕らは、ただぼんやりと、僕らを包み込んでる大空を見ていた。

ずっと、こういう風に、過ごしていきたいと思った。

あの日、までは…

疑問1つめ★（後書き）

この小説は、私が小学生ぐらいのころ書いたものなので、あまり期待しないほうがよろしいですよ。
それでも良いと思ってくれるとやはりうれしいです。

疑問2つめ★

「早月が…自殺した？」僕は目を丸くした。

同時に、頭の中が粉々に砕け散ったように真っ白になった。

え…、え…？なんで…？なん　　で…？

気を失いそうになった。吐き気がおそった。

何度も同じ言葉を繰り返して、僕は地べたに足をつかまれそうな現象を見た。

早月が自殺？なんで？

なんで早月が自殺する必要がある？

ある日の放課後、先生に僕は呼ばれ、その日休みといわれた早月の本当の事実を知った。

僕はもう、先生の顔さえまともに見ることができなかった。

ただもう、早月のことで頭がいっぱいだった。

あれから少し先生は話していたのだろうけど、覚えてなんかいるものか。

僕は上の空だった。
だって、それほどショックが大きかったのだから。
僕は屋上にいった。
満がいると思って…。
満は、あの幽霊の少女の名前。
僕の良き相談相手。少女なら、きっと僕の話を聞いてくれるはずだ…。
そう思った。
「はぁっ…。はぁっ…！」
僕は思いっきり屋上の扉を開けた。
少女は、やはりいた。フェンスに寄りかかって空を見上げていた。
僕があまりにも酷い表情をしていたのか、少女は一瞬驚いた表情をして、そしてにやりと笑った。
「どうした？そんな怖い顔して走ってくるなんて。お前らしくない。」
少女は、きっと僕をからかったのだろうけど、僕はそれどころでは

なかった。
僕は息を整えてから少女に言った。
「早月が…！！」
まだ息が整っていなかったのか、声が途中で途切れた。
しかし、付け足しを少女はした。
「自殺した、か？」
少女は僕からの驚いた目線をよけると、また空を見上げた。
なんで知っているんだ？僕はキッと少女を見つめた。
少女は僕をみようともしないでそのまま話した。
「あたしだって、この世にはいないはずの人間よ？
それぐらい、分からないといけないじゃない。」
少女は笑っていた。
なんとなくそう思った。
僕は、強く少女に言った。
「何でそんなに楽しそうなんだよ。早月が死んだって言うのに…！！」
でも、少女は僕の心をどんどん削っていくように言い放ってきた。

「じゃあ、どうして自殺したか、分かる？
分かるはずもないよね。
早月はあんたに隠していたんだから。」
少女は空を見上げたまま、一人で話していった。
僕は、つばを飲み込みながら、ただ聞いているしかなかった…。
「知りたいなら教えてあげる。早月はね、いじめられていたんだよ。
」
その言葉に、僕はしばらく目を見開いて固まっていた。
そんなの、知らなかった…。
だって、だって早月はそんなこと一度も…！！
戸惑いを隠せない僕を分かったのか、少女は不敵に笑った。
でも、すぐ止めた。
なんだろうと、僕はまっすぐ少女を見つめた。
少女は僕に向き直して言った。
「早月があんたに隠してたのは、あんたを巻き込まないためにだよ。
」
その言葉が、僕の心にずっしりと置かれた。

もしかして、早月は僕のために？
僕のためにずっと隠していたの？
早月…そうなの？

いつのまにか、瞳いっぱいの涙が溢れてきていた。
声には出なかったけど、頭の中では思いっきり泣き叫んでいた。
そんな僕を、少女は初めて、悲しい顔をして見つめていた。
僕は、ただただ、少女を見つめ返すことしかできなかった。

少女は、僕のほうに静かに寄ってきて、僕の頭を優しく撫でた。
そして、同時に言った。
「早月はね、あんたを巻き込みたくないがために、ず…っと！
黙ってたんだよ。」
柔らかく微笑んで、少女はキッと真剣な表情を浮かべた。
それには一瞬ピクリとしたが、少女の話を聞いていたかった。
「あたしは、早月がいじめられていたことを知っていた。

でも、あんたには言わなかった。
だってお前、早月の親友なんだろ？」

その問いかけに、静かに首を縦に動かした。

首を動かしたとたん、少女は僕の髪を引っ張って、無理矢理少女の顔のほうに向けた。

その少女の瞳にこもる何かが、僕には泣きそうになるほど悲しいものだった。

「ならっ！その親友のイマを、何故分かってやらないっ？！
早月が一人寂しい思いをして、お前を守っていたって言うのに、
お前は何をしたんだ？！
親友なら……！」

少女は、本当に怒っていた。

その勢いを、声として僕に向けてきた。

そして、間を空けて今度は悲しく言った。

「…親友なら…
なんで…
なんで、少しの変化で分かってくれないんだ…。
早月は本当に苦しくて…、
その中を…一人で耐えていたんだぞ…？」

少女は泣いていた。

僕は胸が痛かった。
これ以上、何も言ってほしくなかった。
僕の愚かさが、あまりにも酷くて…
自分で自分を殴りたいほどに情けなかった。

ほんとだ、ほんとだ。
僕は何もしてあげれなかったよ。
早月が苦しんでいたのに、ぼくは、
僕は何もしてやれなかった…。

いつの間にか、僕も泣いていた。
でも、僕の涙は、少女よりも大きく、涙が多く流れていった。
そんな僕を、少女は苦笑して見ていた。
そして、僕の瞳から流れる涙を片手で拭いながら言った。
「ほんとっ、鈍い鈍感男。」
その言葉は今の僕には温かく聞こえた。

僕は泣きながら、言葉にならない声を出していた。

「僕は…早月が、苛められている、ことを、
自殺した、ことを…
認めたくなか…ったから…！！
僕…僕っ、早月に謝りたい…
謝りたいよ……。」

必死に言葉を考えていっていた僕を、少女はなだめていた。

僕が言い終わると、少女は悲しく笑って見せた。

「あたしは、２０年ぐらい前のここの生徒でね、
あたしもね、
自殺したんだ。」

悲しく笑って言う少女のほうを僕は口をパクパクさせて驚いた。

そんな僕を気にせず、

少女はそのまま話を進めはじめた。

疑問3つめ★

「あたしは、この世界が嫌いだったんだ。
この腐った醜い世界が。
謎でいっぱいで、意味不明なこの地球が、あたしは嫌いだったんだ。
だから、それから逃れようと、この屋上から自殺した。
幸い、あたしは仲間なんて作んなかったから、悲しむ人なんか一人もいなくて。
家族って言うものもなくて、
あたしはね、ほんと、この世界も、自分の立場も、
全部が嫌いだったんだ…。
でもね、自殺したのに、死んだはずなのにあたしはこの世界にまだいたんだ。
死んだら、何もなくなって、
目の前が真っ白になるんだとばかり思ってて死んだのに…。
あたしはいまだに
この嫌いな世界から逃げられていないんだよ。
なんか、
今更だけど複雑な気持ちなんだよ。
多分…
早月も、今、
あたしが思っていることと同じなんじゃない？
とっても、複雑な気持ち。」

少女が僕の頭から手を離した。その瞬間、涙がピタリと止まった。
まるで魔法をつかったかのようだった。

でもそのとき、なんだか嫌な予感がふとした。
その手が、離れてほしくない気がした。
「…ねぇ、どうしてさ、僕は満が見えるの？」
ずっと思っていたことを言ってみた。
そんな複雑な気持ちなのに、どうして僕の前に現れてきたのか。
少女は微かに笑って一言こう言った。
「あんたがあたしに似てたから。」
へ？
僕に似てる？
どこが？
どうして？
そう聞く前に、少女は答えていた。
「あんた、いっぱい疑問持ってたし、
一人だったし、
前のあたしとどことなく似てたのよねー。
あたしは、あんたと話してみたいと思ったから
あんたの前に現れた。

でも、あんたの将来に、
いちいち手出ししていけないと思ってた。
今になってね、あんた、やっぱりあたしとは違うって思ったわ。
泣きやすいし、あたしより疑問もちすぎだし
……親友ができたし。」

少女は、最後の言葉を強く言っていた。

そのときの顔が、あまりにも優しくて、僕はやっぱり泣いてしまった。

さっきから流れていて、涙がなくなりそうだ。

少女は優しく僕の涙を拭ってくれた。

僕はそのとき、泣き止まなければいけないと、何故か思った。

僕は、何もいえなかった。

やっぱり、情けない自分に、何か言い聞かせたかった。

でも、ぼくは短く言った。

「ねぇ。早月に会ったら、一発、殴っといてね？」

僕は精一杯微笑んでいた。涙を流しながら…。

だって、早月ならわかってくれるだろうから。

その拳に、沢山の思いを込めているから…。

少女はにかりと笑って一言言った。

「あたしは、手加減するような女じゃあないよ？」

その答えに、僕は静かにうなずいた。

少女は僕がうなずくのを見て、僕の襟を掴んだ。

「あんたは、あたしや早月のようにはなるんじゃないよ？
自分自身の人生を、精一杯楽しみな。」

いつもの少女らしい言葉が僕の耳に響いた。

僕は精一杯うなずいて、少女は手を襟からはなしてフェンスに乗った。

「お別れだ。馨。」

少女は、それから目を離さずに、静かにつぶやいた。

僕は涙を拭いて、これ以上こぼれてこないように堪えながら笑った。

「うん。バイバイ…。」

少女は、僕の心を読み取ったのか、一言言って間を空けた。

「感情が言葉に出すぎなんだよ。バァカ。」

クスリッと笑った少女の声も、なんだか震えていた。

そして最後に言った。

「この腐れかかった意味不明な世界をただ生きていれば、
それだけであたしは立派だと思う。
あんたはあんたなりに生きてみな。
死んでからじゃ、何もかもが遅いんだから。
あんたがもし、この世界から逃げ出したのなら、
あたしも、
早月も、
あんたを快く受け入れることはしないよ。
だから、
最後まであきらめるな！！以上！」

少女はそう言い切って足に軽く力を入れ、スゥっとどこかに消え去っていった。

少女が消えてから、僕は静かにうなずいた。

「もちろん、あきらめなんかしないよ。二人とも、ありがと。」

僕は空に向かって、今一番の精一杯の微笑みを見せた。

だって、この空に、早月や少女がいるだろうから…。

僕は、諦めなんかしやしないよ。

二人が見守ってさえすれば、僕は何も怖くなんかないから。
だから、いままで一緒にいてくれて、僕を慰めてくれて、
ありがとう。
そういって僕は、残りの道を歩くことにした。
人生っていう道をね。
これから、もっと辛いことが起こるだろうけど、僕はそれも乗り越えられそうな気がする。
頑張るよ。
僕は。
だから、
いつまでも、
僕を見守っていてね？
二人とも…。
これからも

この大空は、
きっと僕の支えになるだろうね。
そう思って、
大空にだけ、
僕は細長く温かい涙を流した。

そして、
疑問を沢山持った僕が、
今度はその疑問に答えられるようになろうと、
そう試みることにしてみた。

僕は生きるよ。
この、意味不明な世界を。
一歩一歩、
同じ速さで。

疑問3つめ★（後書き）

さぁ終わりでございますが、
どうでしたでしょうか。
一言でも良いのでメッセージをくれるとありがたいです。
期待されていなかった方は…
まぁ、そうですよね…（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3463d/

僕と彼女と疑問と

2010年10月27日13時52分発行